

おんす

特定非営利活動法人

沖縄伝承話資料センターだより

第1号 2007年5月20日発行

TEL 098-890-2455 FAX 同

事務局〒901 denshow1@otc.ne.jp

総会を迎えて

本日、二〇〇七年五月二十日、沖縄伝承話資料センターの総会を迎えました。設立総会を含めると三回目のこととなります。なんとか、この日を迎えられたことを共に喜びたいと思います。しかしながら設立当初にご参集いただいた時に比べると参加者の数が減少してきているのが大変気になります。また、会員数も減ってきているのは事実です。

設立当初は、多くの方が危機感を持って集まって下さったと考えます。その危機はまだまだ消えてはいないのです。確実に消失していく伝承話を私たちがどうすべきなのかという課題は残ったままです。

伝承話資料センターの会員になったからといって特段お得なことは殆どありません。NPO法人の性

格上、ボランティア活動です。しかし、この沖縄に残された貴重な財産いや、人類の財産です。民話調査に参加した、しなかつたに聞わらず誰もがそのことを認識する必要があると思います。

私たちの活動は地味で、マスコミなどには大きく取り上げられることは稀ですが、着実に活動しています。本土からの高校の修学旅行生が三校、沖縄の文化の一つとして民話を学習するためにセンターまで足を運んできました。また、ちゅら海水族館の季刊広報誌の中に沖縄の民話を毎月掲載しています。

NPO法人は利益を求めない団体ですが、会の運営は会員の会費が支えています。しかし、このままでは運営が危ないです。再度、会員の新規加入、継続加入を呼びかけたいと思います。また知人友人にもお誘いをよろしくお願い致します。



「沖縄 伝承の旅」

再び開催します。ご期待下さい。

昨年好評だった「民話の部屋」を

「民話の部屋」の開催

資料を残すだけでなく次代への継承も大切なことです。是非ご参加下さい。

「民話の部屋」の開催

直接、生の語りを聞くチャンスがない我々にとっては貴重な時間となることと思います。

語り部養成講座の開設

資料を残すだけでなく次代への継承も大切なことです。是非ご参加下さい。

「民話の部屋」の開催

昨年好評だった「民話の部屋」を

再び開催します。ご期待下さい。

「民話の部屋」の開催

資料を残すだけでなく次代への継承も大切なことです。是非ご参加下さい。

「民話の部屋」の開催

昨年好評だった「民話の部屋」を

再び開催します。ご期待下さい。

会員の輪を広げよう

伝承話資料センターは一部の人達だけでなく、沢山の人達に認知して頂くためにも幅広く声かけと八会勧誘をよろしくお願い致します。また、催し物にも気軽に「ご参加下さい」。

メールマガジンの登録を

センター会員の通信案内を充実するため会員のメールマガジンを作成しています。パソコンあるいは携帯のメールアドレスをお持ちの方はセンターのメールアドレスかメールへご連絡下さい。センターへの連絡は本紙の右上に表記されています。

平成十九年度の事業予定

センター主催の事業として、資料のデータベース化

現在ある音声記録はカセットテープに収録されています。それをCDなどデジタル化し、将来的に誰もが聞けるようにすることです。

民話調査の実施

直接、生の語りを聞くチャンスがない我々にとっては貴重な時間となることと思います。

語り部養成講座の開設

資料を残すだけでなく次代への継承も大切なことです。是非ご参加下さい。

「民話の部屋」の開催

昨年好評だった「民話の部屋」を

再び開催します。ご期待下さい。

地元のことを案外知らない伝説の地などの紹介をまた企画します。他にもいろいろな事業を展開する予定ですので、ホームページやセンター便りなどで見落としがないようよろしくお願い致します。

デジタル化作業着々と進行中

皆さんは、「日本民話の会」のホームページをご覧になったことがありませんか。話者の音声聞くことができようになっています。その一つに沖縄版として名護市の山本川恒さんの民話が聴けます。将来的には沖縄伝承話資料センターのホームページでも県の殆どの伝承話がネットを通して聴くことができるようになります。今、作業中です。乞うご期待！

運営委員会からお願い

現在、事務局には宜保清美（きよみ）と新城京美（たかみ）の二人が詰めています。予算書の通り殆ど手当がありません。しかし、全ての催しや連絡の手配など多くの仕事をこなしている状況です。そのため少しでも負担を軽くするため事務局は月々金の午後一時〜六時の勤務になつておりますので、何卒ご理解、ご協力をお願い致します。

民話エッセイ

多良間のウプリ

会員 泉 武

4月に入って待望していた多良間のウプリを見学した。本島などでは、どこからか虫を捕まえてきて、適当な舟を造って浜から流すことが行われてきた。ところが、多良間では①虫を捕獲するところが決まっている。②虫流しの行事は特定の浜の洞窟の前で祈願がある。③流すのではなくわざわざ海に入り、特定の岩に沈めてくるというのである。

虫取りの地点は2カ所。ともに集落を囲うパーク（抱護林）から南に20分ほどの地点である。そこには自然の岩と草木が雑然と生い茂った一画がある。そこだけは草刈りなどは一切しないという。サトウキビがあったり、道路が迂回する中にあり、開墾から取り残された虫たちの棲みかにふさわしい景観である。

ウプリ実行委員の方々により捕獲された虫たちは、一旦イビの拝所に集められ、そこで舟が造られた。舟はテリハボクの枝の先端を縛り、サンゴ石も結わえられた。虫どもはクワズイモの葉に包まれて舟の真ん中に乗せられている。

仲筋の祭場はウプドゥマリから降りた浜で、ここに段丘面から露出した洞窟がある。一旦この前で祈願が行われ、いよいよイノー内にある特定の岩まで沈めるのである。

当日はカラッと晴れ上がった。若者二人が舟を担いで海に入ってしまった。400メートルほどか。その岩が近くなるにつれて胸を越すほどの深さであった。10分ほどで無事若者は戻り、浜では長老達を中心に今年の豊作を祈願して直会が行われた。

ウプリではなぜ洞窟前での祈願があるのか。流すのではなく直接沈めるということの意味は、などいくつもの興味が膨らんだ。

ところが多良間のウプリより強力な虫送りを岡本恵昭さんは報告していた。

来間島ではムスヌンという。ここでは、特定の選ばれた人がそれぞれ虫取り役、殺し役、泳ぎ役を分担する。虫どもはシャコ貝に、焼き殺して入れられ、ムスヌンバマから30メートル沖合の地点まで泳いで、そこから潜って定まった海底の洞窟に置いてくるという。

海底の洞窟は竜宮のジーとよばれ、そこに呑み込ませるように送り出すという。

奈良時代から平安時代には大祓の儀式が盛大に行われた。すべての天つ罪、国つ罪の一切を流してしまうという。実際に平安京の川原や難波の浜が祭場となった。

では、流された罪の最終地点はどうなっているか。大祓祝詞には、急流の瀬の神であるセオリツヒメがその罪を大海原に持ち出し、多くの瀬が一つになって渦のようになったところに居るハヤアキツメが、がぶがぶと罪を呑み込むという。そしてイブキドヌシが根の国・底の国へ吹き放ち、そこで待ち構えていたハヤサスラヒメがどこかに蹴散らすという。

海底に送られた虫たちは、きっとそこに待ち構える神に呑み込まれたに違いない。